

令和6年度病害虫発生予報 第4号（8月予報）の送付について

今月の発生に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水稲	セジロウンカ	平年並	やや多い
	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い
カキ	炭そ病	平年並	やや多い
ナシ	黒斑病	平年並	やや多い
果樹共通	カメムシ類	早い	多い
チャ	チャノホソガ	やや早い	平年並
	チャノキイロアザミウマ	平年並	やや多い
イチゴ	うどんこ病	平年並	やや多い
トマト	すすかび病	平年並	やや多い
	アブラムシ類	平年並	やや多い
野菜・花き類	シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い
	ハスモンヨトウ	やや早い	やや多い
アブラナ科野菜類	ハイマダラノメイガ	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：7/27～8/26）

気温：平年より高い確率80% 降水量：ほぼ平年並の確率40%
日照時間：ほぼ平年並か多い確率40%

○今月の農薬適正使用のポイント

1. 農薬散布時の注意事項

- ①農薬散布は極端な高温時を避け、散布後に葉が濡れた状態が長時間続かないように、散布時間帯や天候、換気等に配慮しましょう。
- ②散布後に葉が乾いてから、残った薬液等による重複散布を行わないようにしましょう。薬害、農薬残留基準値超過の恐れがあります。

2. 農薬の適用作物名

農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。「トマトとミニトマト」、「ピーマンとシシトウ」、「実えんどう（未成熟な種子を収穫するもの）とさやえんどう（未成熟なさや付き豆を収穫するもの）とえんどうまめ（成熟した種子を収穫するもの）」、「ブロッコリーと茎ブロッコリー」などは、いずれも農薬登録内容が異なります。このほかにも、判断に迷った場合には各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へお尋ねください。

6月1日～9月30日は農薬危害防止運動の重点実施期間です。今年度の運動のテーマは「農薬は 周りに配慮し 正しく使用」です。農薬のラベル記載事項の遵守と使用履歴の記帳、ドリフト対策の徹底、薬剤の適正な保管管理等、農薬適正使用について指導の徹底をお願いします。

○今月の病害虫対策のポイント

1. 天候と病害虫発生

高温乾燥により、ウンカ類、ハダニ類、チャノホコリダニなどの微小害虫が急増しやすい時期です。作物の様子をよく観察して、適期防除に努めましょう。

また、夕立や台風接近が増加する時期です。ナス褐色腐敗病など、激しい降雨によって増加しやすい病害にも注意しましょう。

2. クビアカツヤカミキリ

モモ、スモモ、ウメ、サクラを加害する外来生物クビアカツヤカミキリの発生地域が拡大しています。8月は加害がピークを迎える時期ですので、園内をよく観察しましょう。樹幹からフラス（木くずと虫糞が混じったもの）が大量に出ている場合は、最寄りの農林（農業）振興事務所か病害虫防除所にご相談ください。

I. 普通作物

1. 水稻

(1) いもち病（穂いもち）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、葉いもちの発生ほ場率は平坦地域で9.3%、中山間地域で14.9%でした。
- 2) 山あいのほ場や葉いもちが多発しているほ場では、穂いもちの発生が懸念されます。
- 3) 今後、出穂期の天候不順によって、穂いもちの発生が助長される可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 中山間地域の常発地域では、上位葉に葉いもちが発生している場合や周囲に多発ほ場がある場合は、出穂期の降雨によって穂いもちが発生しますので、必ず出穂期の防除を行います。
- 2) 水和剤、粉剤等による穂いもちの防除適期は、出穂始めです。中山間地域の葉いもちの多発ほ場では、出穂期の天候が悪ければ、穂ぞろい期（8割程度出穂した時期）に2回目の防除を行います。
- 3) 周辺の農作物等への農薬の飛散の影響が考えられる場合には、飛散の少ない粒剤を使用します。粒剤を使用する場合は、薬剤によって出穂前の使用時期が異なるので、遅れないように散布します。また、粒剤の施用後1週間は止水します。
- 4) 出穂後に穂いもちが多発した場合には、収穫前使用時期に注意し、傾穂期までに早めに追加防除を行います。

(2) 紋枯病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、平坦地域、中山間地域ともに発生が認められませんでした。
- 2) 今後、定期的な降雨があれば上位葉へ病斑が進展する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 平坦地域での防除適期は中干し期の7月下旬～8月上旬です。発生ほ場では遅れないように防除を行います。また、中山間地域の発生ほ場では、8月中旬頃までに中位葉鞘への病斑の進展が認められれば、収穫前使用時期に注意して直ちに防除を行います。
- 2) 水和剤や粉剤で防除する場合には、株元に薬剤がよくかかるよう、落水してから防除します。

(3) ばか苗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、平坦地域、中山間地域ともに発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内をよく観察し、発病が認められた場合はすみやかに株ごと抜き取り、焼却するか地中へ埋設して処分します。特に採種ほ周辺では、発病株の抜き取りを徹底します。
- 2) 発生ほ場では自家採種を控え、種子更新を行います。また、次年度の種子消毒を徹底します。

(4)ニカメイガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への誘殺は認めていません。

防除上の注意事項

- 1) コンバインの普及と長期残効性箱施用剤の使用により、近年はほとんど発生が見られませんが、稀に突発的な多発が起こります。穂ばらみ前に葉鞘下部の変色や心枯れがないか、出穂期の出すくみや白穂がないかよく観察します。このような株があれば、茎を割いて虫糞や幼虫がないか確認します。
- 2) 長年防除を省略していたり、越冬源となる稲わらを保管している地域では発生が増加していく傾向がありますので、8月中旬の基幹防除を行います。

(5)セジロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率と株当たり頭数は、それぞれ平坦地域 54%と 0.4 頭、中山間地域 73%と 0.1 頭でした。

防除上の注意事項

- 1) 移植時に長期残効性箱処理剤を処理していない水田では、ほ場での発生がないか注意して観察します。
- 2) 今後、株当たり平均 10 頭以上の発生を認めた場合は防除を行います。

(6)トビイロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来世代の飛来は認めていません。
- 3) 8月以降も高温が続くと増加する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) トビイロウンカに効果の高い箱粒剤を使用していない場合は、8月上旬にトレボン粒剤やスタークル/アルバリン粒剤などで防除します。
- 2) 薬剤散布を行う場合は株元まで薬剤が届くよう丁寧に行います。

(7)斑点米カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率は平坦地域では 46%、中山間地域では 47% でした。
- 2) 平坦地域ではアカスジカスミカメとホソハリカメムシが、中山間地域ではホソハリカメムシとクモヘリカメムシが優占しています。
- 3) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯では、クモヘリカメムシとイネカメムシ、アカスジカスミカメの誘殺量が平年よりやや多いです。

防除上の注意事項

- 1) 平坦地域では出穂前にスタークル/アルバリン粒剤等で防除します。
- 2) 出穂前の防除や畦畔の除草ができなかったほ場や、出穂 10 日後の乳熟期に殺虫剤による防除を行います。
- 3) 例年被害の多いほ場では、出穂前と 10 日後の 2 回防除を行います。
- 4) 水田の周縁部に被害の多い傾向があるので、発生が少ない場合には額縁防除でも有効です。

(8)コブノメイガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの誘殺は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 長期残効性箱処理剤を使用していない場合は、発生の有無をよく観察して、食害が認められたら直ちに防除します。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量 やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、甘柿園（富有）における炭そ病の発病果率は1.0%で、平年に比べてやや多かったです。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布のみでまん延を防ぐことは難しいので、ほ場から発病枝や発病果をできる限り除去して園外に持ち出し、秋期の感染源を減らしておくことが重要です。
- 2) 8月上中旬に基幹防除をします。8月の高温期には病勢は停滞しますが、低温・降雨が続く場合や台風通過後には、治療効果を有する殺菌剤で速やかに追加防除をします。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、発病葉率は1.2%で、平年に比べてやや少なかったです。

防除上の注意事項

- 1) 発生の多い園では8月上中旬の基幹防除時にうどんこ病に登録のある薬剤を用い、秋季のまん延防止に努めます。

(3) フジコナカイガラムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では、寄生果率は1.2%で平年並みでした。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布前に徒長枝や重なり枝を整理し、薬液がかかりやすくしておきます。
- 2) カイガラムシのいるヘタ裏側に薬液が十分かかるように丁寧に散布します。甘柿はヘタと果実の隙間が狭く、カイガラムシに薬液が届きにくいので、特に丁寧に散布します。多発園では散布してから7～10日後頃に再度散布をすると防除効果が高まります。
- 3) 成幼虫が混在する場合がありますので、スミチオン水和剤40等の有機リン剤の効果は低くなります。多発園ではモスピラン顆粒水溶剤、コルト顆粒水和剤、トランスフォームフロアブルなどを散布します。

(4) カキノヘタムシガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 五條市の富有の満開盛期から有効積算温度法で予測した第一世代成虫の発生盛期は7月21日で平年並となっています。

防除上の注意事項

- 1) 第二世代幼虫の防除適期は、第一世代成虫発生盛期の約3～10日後が目安となります。
- 2) 前年多発園および6月の果実被害が多かった園では、通常のヘタムシ防除の7日後に追加防除を行うか、残効の長い薬剤を用いると防除効果が高まります。

2. ナシ

(1) 黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発病葉率は7.0%で、平年に比べてやや多かったです。

防除上の注意事項

- 1) 収穫期まで降雨による感染が続きますので、発生状況に応じて薬剤ごとの収穫前使用時期を必ず確認してから、薬剤を散布します。
- 2) 薬剤の散布前に混み合った枝を整理し、薬液がかかりやすくしておきます。散布時にはかかりむらのないよう丁寧に散布します。

(2) 黒星病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月下旬の巡回調査では発病葉率は6.5%で、平年並みでした。

防除上の注意事項

- 1) 収穫期まで降雨による感染が続きますので、発生状況に応じて薬剤ごとの収穫前使用時期を必ず確認してから、薬剤を散布します。
- 2) 薬剤の散布前に混み合った枝を整理し、薬液がかかりやすくしておきます。散布時にはかかりむらのないよう丁寧に散布します。

(3) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月下旬の調査では寄生葉率は0.5%で、平年と比べてやや少なかったです。

防除上の注意事項

- 1) 薬剤散布は丁寧にいき、散布むらのないようにします。
- 2) 不要な徒長枝を置かない、重なり枝を作らない等、薬液がかかりやすいような工夫を心がけます。
- 3) 高温・乾燥がハダニの増殖に適した条件ですので、発生状況には十分注意します。

3. 果樹共通

(1) カメムシ類 (チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ)

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺数は、県内の各地点で百頭を超える日が連日あり、なかには数百～千頭を超える地点・日もあり、かつてないほど多い状況です。
- 2) 7月下旬の巡回調査では、ヒノキ樹へのカメムシの寄生数は平均1.0頭で、寄生樹率は25.7%と寄生が見られた地点は少なかったです。また、ヒノキ球果の口針鞘数は平均1.5本で、ヒノキからの離脱が始まるとされる25本を下回っていました。

防除上の注意事項

- 1) 5月16日に果樹カメムシ類発生予察注意報を公表していますので参照してください。
- 2) 予察情報等を参考に園地をこまめに見回り、早期発見・防除に努めます。山林に近い園、過去にカメムシ被害の多い園は特に注意します。
- 3) カメムシはこの時期にスギ・ヒノキの球果を吸汁しますが、巡回調査時の球果数は平年に比べて少ない傾向にあるため、園地への飛来数の増加や早期化の恐れがあります。
- 4) カメムシは蒸し暑い夜に園地へ飛来することが多くなる傾向があります。
- 5) カキ、モモ晩生品種、ナシが被害を受けやすい時期です。有袋栽培でも肥大がすすむと袋の上から吸汁されますので注意します。
- 6) 黄色灯はチャバネアオカメムシの被害軽減に有効ですが、クサギカメムシやツヤアオカメムシには効果がないので、光源近くや園内で両種が目立つ場合は薬剤防除が必要です。また、電撃殺虫器、果樹園に面した蛍光灯などの光源はカメムシを誘引するので、できる限り消灯します。

4. チャ

(1)炭そ病・もち病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 二番茶摘採後に伸長した葉での炭そ病の罹病葉数は 8.85 枚/m²でした。
- 2) 二番茶摘採後に伸長した葉でのもち病の罹病葉数は 0.02 枚/m²でした。

防除上の注意事項

- 1) 開葉期が防除適期です。
- 2) 二番茶摘採残葉での発生が多く、降雨が続く場合、開葉期に銅水和剤など予防剤で防除します。その後発生が認められる場合、治療効果のある剤で防除を行います。

(2)チャノコカクモンハマキ・チャハマキ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（チャノコカクモンハマキ）
やや少ない（チャハマキ）

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）のフェロモントラップにおける7月第4半旬までの誘殺状況は、チャノコカクモンハマキは平年並で、チャハマキは平年に比べてやや少ない状況でした。発蛾最盛期は8月上旬頃の見込みです。

防除上の注意事項

- 1) 発蛾最盛期の7～10日後が防除適期です。

(3)チャノホソガ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 大和茶研究センター（奈良市矢田原町）内のフェロモントラップにおける7月第4半旬までの誘殺状況は、発生時期がやや早く、発生量は平年並でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋芽が連続して生育する更新園、幼木園では加害されやすいため、防除が必要です。

(4)チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中旬の調査での発生圃場率は75%でした。
- 2) たたき落とし法による落下虫数は6.5匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋芽の生育に多大な影響を及ぼすため、開葉期の防除を徹底します。

(5)チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中旬の調査での発生圃場率は100%でした。
- 2) たたき落とし法による落下虫数は46.9匹でした。

防除上の注意事項

- 1) 秋芽の生育に多大な影響を及ぼすため、開葉期の防除を徹底します。

(6)カンザワハダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中旬の調査での発生圃場率は37.5%でした。
- 2) 寄生葉率は0.59%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発生が認められる場合は、早期に薬剤散布を行います。
- 2) 薬剤の感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

(7)クワシロカイガラムシ

予報内容 幼虫ふ化期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中旬の調査での発生圃場率は87.5%でした。

防除上の注意事項

- 1) 7月中旬の調査では一部の個体に産卵が確認されましたが、ほとんどの個体で産卵はまだ確認されませんでした。
- 2) 平年の防除適期は8月上中旬と見込まれますが、地域によって適期は異なります。
- 3) 寄生枝を瓶挿しするか、株の中に10cm四方の粘着トラップを茶株面から10cm下に垂直に設置して幼虫の孵化を確認し、防除適期を把握します。
- 4) 夏期のふ化は長期にわたります。冬期にプルートMCを散布していないほ場で1番茶後の防除を行わなかったほ場や発生の多いほ場では、ふ化の状況を確認した上で、必ず5日間隔で2回の防除を行います。
- 5) 薬液が株の内部（樹冠下の枝条）に十分付着するよう、丁寧に散布します。

(8)チャトゲコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中旬の調査での発生圃場率は100%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除適期は若齢幼虫期（成虫発生が収束した頃）の8月上中旬頃と見込まれますが、地域によって適期は異なります。
- 2) 薬剤は茶株すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。
- 3) 薬剤の感受性の低下を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けます。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ（育苗）

(1)萎黄病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 今後、高温により発病が助長されると予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 発病株は、周囲の培土（土壌）およびランナーも含めて早期に持ち出し、肥料袋等に入れて密閉して処分します。
- 2) 苗床は、浸水や冠水しないように管理します。オガクズ栽培では底部に水が溜りやすいので、特に排水対策を徹底します。
- 3) 本ぼの太陽熱による土壌消毒の処理期間は、通常7月中旬～8月中旬の30日間以上を目安にします。処理中には、被覆ビニールの破れ等を必ず点検します。なお、処理途中での追加注水は地温を下げるので、処理前に十分注水しておきます。
- 4) 本ぼの土壌消毒後は、汚染土壌の付着や移動によって病原菌を持ち込まないよう、農作業や浸冠水に注意します。

(2)炭そ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 8月以降にランナーや子苗が混み合ってくると高温多湿となり、急激に被害が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 発生前からアントラコール顆粒水和剤、ジマンダイセン水和剤による定期的な予防散布を行います。上記に加えて、強い風雨等の後や葉かき、ランナーカットの作業後にはベルコート水和剤、セイビアーフロアブル20等を散布します。
- 2) アミスター20フロアブル、ベンレート水和剤は、耐性菌が確認されているため、炭そ

病防除には使用を控えます。

- 3) 発病株を発見した場合は、発生部の周囲をシートや古ビニールで被覆した後、直ちにニマイバー水和剤、またはゲッター水和剤を散布します。
- 4) 夜温が25℃以上となる高温・多湿時に多発しやすくなります。古都華、アスカルビー、章姫、さがほのか等の罹病性の品種では、苗床が混み合って蒸れないように、必ず株の整理を行います。
- 5) 多かん水や排水不良による過湿は、本病の発生に好適な条件となるので注意します。点滴かん水による雨除け育苗は、本病の防除に非常に有効です。

(3) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率37.5%、発病小葉率0.4%でした。
- 2) 高温時は一時的に病勢が衰え、発生は目立たなくなりますが、8月下旬以降に気温の低下とともに再び病勢が進展し、発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 雨除けした寒冷紗の被覆下で発病しやすく、また過繁茂になると発病を見逃しやすいので、注意が必要です。
- 2) 発生ほ場では、必要なランナー数が確保できれば、親株は早めに除去し、葉かきを行って伝染源を除去するとともに、薬剤をかかりやすくしてから薬剤防除を行います。
- 3) 薬剤防除は、サンヨール、ジーファイン水和剤、ベルコート水和剤、サンクリスタル乳剤等で予防に努め、発生初期にスクレアフロアブル、パンチョ TF 顆粒水和剤、パレード20フロアブル等を散布します。なお、耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用は避けます。

2. 夏秋トマト

(1) すずかび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率66.7%、発病葉率2.3%でした。
- 2) 今後、高温、多湿により発病が助長されます。

防除上の注意事項

- 1) 密植を避け、過繁茂にならないように管理し、風通しをよくします。
- 2) 下葉の発病葉は伝染源となるため、発生ほ場では早期に摘葉し、圃場外へ持ち出し処分します。
- 3) 薬剤防除は、発病前にはダコニール1000、ベルコートフロアブルなどの保護殺菌剤を散布します。発病後にはこれら殺菌剤に加えて、スコア顆粒水和剤（ミニトマトには登録なし）、トリフミン水和剤などのDMI剤を加えた体系防除を行います。

(2) オンシツコナジラミ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) アザミウマ対策でスピノエース顆粒水和剤などを散布した場合には、土着寄生バチの減少によりコナジラミが増加しやすくなるので、発生の推移をよく観察します。
- 2) 成虫は新葉に多く、老齢幼虫は中位～下位葉に多いです。発生初期は、ほ場内での発生株に偏りがありますので、対面作業の際に発生の有無をよく観察します。排泄物によるすす病が見られる場合は、葉裏をめくって寄生葉を探し、多数の幼虫が集まっている葉を除去してほ場外で処分します。
- 3) 黄色粘着板によるモニタリングも発生確認に有効です。
- 4) 発生が認められたら、コルト顆粒水和剤などを散布します。

3. ナス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 台風の接近等で強風を伴う降雨が続くと、発病が助長されます。降雨後に予防散布を励行します。
- 2) 被害枝葉及び果実は伝染源となるので、必ず早期にほ場外へ持ち出して処分します。
- 3) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、敷きワラやマルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。

(2)うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率 20.0%、発病葉率 1.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 多発ほ場では整枝剪定を行い通風を良くし、多肥栽培を避け適切な肥培管理による樹勢維持に努めます。
- 2) 病気蔓延後の薬剤防除では効果が劣ります。パルミノ、ダコニール 1000 等で発生前の薬剤防除を徹底します。

(3)ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) ほ場に隣接するスイカやキュウリで発生していた場合、栽培終了後に放置された枯れ株から成虫が飛来してきますので、残さの確実な処分と防除を心がけます。
- 2) 多くの殺虫剤に対する感受性が低下しています。夏秋ナスでは、土着天敵が増加・活動する時期ですので、ピレスロイド剤、ネオニコチノイド剤、有機リン剤、カーバメート剤、マクロライド系剤等、天敵に悪影響のある殺虫剤の使用を控えます。常発地において、カメムシ類防除のためにネオニコチノイド剤を散布する場合には、ミナミキイロアザミウマ対策としてファインセーブフロアブルも散布します。

(4)カスミカメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、平均被害芽率は 5.2%でした。

防除上の注意事項

- 1) 新葉をよく観察し、奇形や丸い小孔が観察されたら直ちに防除します。
- 2) 被害が発生しているほ場では、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤を散布します。ただし、土着天敵の減少により防除後にミナミキイロアザミウマが増加する場合がありますので、前項を参考に別途対策を行います。

(5)チャノホコリダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 晴天が続くと被害が増加するおそれがあります。

防除上の注意事項

- 1) 生長点付近をよく観察します。発生初期には新芽の伸張が悪く、新葉の葉裏にやや褐色がかつた光沢が観察されます。果実被害が発生してからでは防除効果が劣りますので、発生初期の防除を心がけます。
- 2) 登録のある殺ダニ剤はいずれも殺虫効果が高いですが、土着天敵温存に取り組んでいる場合は、スターマイトフロアブルまたはコテツフロアブルで防除します。

4. ネギ

(1) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理の効果が比較的高いため、発生初期に処理します。処理薬量が少ないと効果が低いので、ラベルに書かれた濃度、薬量をよく確認して処理します。また定植ネギの場合は、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの生育期株元灌注処理後も発生によく注意して、再発生が見られた場合はリーフガード顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) ハモグリバエが多発した残さは次の発生源になるため、できるだけほ場の外に持ち出して処分します。また、多発ほ場の株元土中にはハモグリバエの蛹が高密度で残存するため、次作の前にバスアミド微粒剤などを処理します。

(2) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率67%、被害株率11%でした。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期株元灌注処理でネギハモグリバエと同時に防除します。また定植ネギの場合も同様に、育苗期後半～定植当日に育苗トレイに灌注処理を行います。
- 2) ベリマークSCの株元灌注処理後もよく観察し、再発生が見られた場合は登録のある薬剤を定期的に散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいため、スカッシュ、まくびかなどの展着剤を加用します。
- 3) 一部の地域で殺虫剤感受性の低下した個体群が認められます。防除効果に疑いがある場合は、各農林（農業）振興事務所か病害虫防除所にご相談ください。

5. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0%、発病株率1.2%でした。
- 2) 高温により病勢は停滞しますが、秋雨とともに発生が拡大する恐れがあります。

防除上の注意事項

- 1) 下葉の発病葉は伝染源となるので、発生ほ場では早期に摘葉し、ほ場に放置せず土に埋める等処分します。収穫後、必要のない株は放置せず、早期に処分します。
- 2) 今後、夜温が25℃以下に低下し、降雨が続く場合には、降雨後に上位葉を中心にカナメフロアブル、アンビルフロアブル、ラリー乳剤などを用いて予防します。また耐性菌の出現を避けるため同一系統薬剤の連用は避けます。
- 3) 収穫後の次年度親株は、早期に下葉を摘葉・処分します。その後、秋雨期には予防散布を行います。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 **発生量**：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0%、発生株率1.4%でした。

防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にはダコニール1000等で防除します。

6. 野菜類・花き類共通

(1) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い（トマト）
平年並（イチゴ・ネギ・キク）
やや少ない（ハウレンソウ・ナス）

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査での発生ほ場率は、イチゴ育苗 22%、トマト 33%、キク 17% でした。ハウレンソウ、ナス、ネギでは発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) イチゴやトマトで夏に増えやすいワタアブラムシが発生しています。ワタアブラムシは薬剤抵抗性が発達しやすく、各種殺虫剤に対する感受性が低下した個体群が発生しています。同一系統薬剤の連用は避け、薬剤散布の効果が高いと感じた場合は、各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。
- 2) イチゴ本ぼのハダニ防除にカブリダニ製剤の使用を予定している場合、育苗ほでの使用薬剤の選択に注意します。有機リン・合成ピレスロイド・ネオニコチノイド系薬剤をはじめ、育苗期、育苗後期からは使用できない薬剤があります。詳しくは、各農林（農業）振興事務所へお問い合わせください。

(2) ハダニ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査での発生ほ場率はナス 50%、イチゴ育苗 56%、キク 67% でした。
- 2) 今後の晴天と高温による密度増加が予想されます。

防除上の注意事項

- 1) 雨よけなどハウス栽培では、天候にかかわらず密度が増加しやすいので注意します。
- 2) イチゴ、キクのナミハダニは、多くの殺ダニ剤に対する感受性の低下した個体群が増えています。薬剤の効果に疑問を感じた場合は各農林（農業）振興事務所または病害虫防除所へご相談ください。また、薬剤感受性の低下を避けるために、同一薬剤の連用は避けます。
- 3) ナスのカンザワハダニは、葉の黄化を注意して観察します。雨が降らない場合は特に増加が早いので、発生を認め次第、直ちに防除します。
- 4) イチゴ育苗では土着天敵の活動が盛んな時期ですので、有機リン・ピレスロイド・ネオニコチノイド系薬剤の使用を控え、天敵に対する影響の少ないムシラップなどの気門封鎖剤を使用します。
- 5) イチゴ本ぼのハダニ防除にカブリダニ製剤の使用を予定している場合は、薬剤の選択に注意します。育苗期、育苗後期からは使用できない薬剤があります。詳しくは、各農林（農業）振興事務所へお問い合わせください。

(3) ミカンキイロアザミウマ・ヒラズハナアザミウマ（トマト、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、夏秋トマトの白ぶくれ果率は 0.3%、キクでは発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) トマトでは花に飛来した成虫の産卵痕が白ぶくれ果となります。白い紙の上で花房を叩き、アザミウマが落下してきた場合は防除します。
- 2) スピノエース顆粒水和剤に対するアザミウマ類の感受性低下を確認しています。当面の間は本剤の使用回数を最小限にとどめ、さらなる抵抗性の発達を防止するため、同一系統薬剤の連用を控えます。

(4) オオタバコガ（ナス、トマト、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生ほ場率はナスで33%、キクで17%でした。トマトでは発生が認められませんでした。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの飛来量は平年並で推移しています。

防除上の注意事項

- 1) 8月上旬以降は発生ピークが不明瞭になると予想されます。新葉の裏側や蕾に産卵しますので、発生をよく観察して初期防除に努めます。
- 2) ナスでは、ふ化幼虫の食入により蕾や花が落下しますので、落下した花蕾を割って、幼虫発生や食害の有無を確認します。栄養生長期のキクでは新芽の中を覗き、ふ化幼虫の食入の有無を観察します。
- 3) 果菜類の被害果には幼虫が入っているので、早めに除去して捕殺します。
- 4) 今後、発生が続くと予想されますので、多発地では定期的に防除します。幼虫が大きくなると殺虫剤の効果が低下しますので、ほ場をよく観察して幼虫が小さいうちに防除します。

(5) シロイチモジヨトウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 7月中下旬の巡回調査では、発生が認められませんでした。
- 2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップへの飛来量はやや多く推移しています。

防除上の注意事項

- 1) 8月以降に増加します。特に、ネギやキャベツ等アブラナ科作物を好みますので、被害に注意します。
- 2) プレバゾンフロアブル5、フェニックス顆粒水和剤、アフーム乳剤等に対する感受性が低下した個体群が発生しているため、防除薬剤の選択に注意します。現在、効果が高いと考えられるのは、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、コテツフロアブル、グレーシア乳剤ですので、品目毎の登録内容を確認して使用します（作物によっては登録のないものもあるので登録の有無を必ず確認して下さい）。また、明らかな防除効果不足が見られた場合は、病虫害防除所または各農林（農業）振興事務所にご相談ください。

(6) ハスモンヨトウ

予報内容 発生時期：やや早い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）のフェロモントラップの誘殺数は、7月中旬以降増加しています。
- 2) 7月中下旬の巡回調査では発生を認めていませんが、一部のほ場で卵塊を確認しています。

防除上の注意事項

- 1) ほ場での初発が早いので、作物をよく観察して下さい。ふ化幼虫の加害による白変葉や、葉裏の卵塊、幼虫を確認したら、直ちに防除します。
- 2) スピノエース顆粒水和剤に対する感受性が低下した個体群が広範囲で発生しています。防除薬剤の選択に注意し、明らかな防除効果不足が見られた場合は、病虫害防除所または各農林（農業）振興事務所にご相談ください。

(7) ハイマダラノメイガ（アブラナ科野菜類）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 気象予報では、8月の気温は高いと予想されています。

防除上の注意事項

- 1) 作物の成長点付近をよく観察して、発生が見られたら直ちに防除します。
- 2) 育苗期後半または定植時に粒剤またはセルトレイに灌注できる薬剤の処理が有効です。

※農薬に関する情報は、令和6年7月30日までの農薬登録情報に基づいて記載して
います。

お問い合わせは

奈良県病虫害防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

病虫害防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

病虫害防除所/奈良県公式ホームページ

<http://www.pref.nara.jp/1557.htm>

奈良県農薬情報システム（農作物病虫害・雑草防除指導指針）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/nara>